

「思考ツール」と「振り返り」で授業を変える
～社会科実践を通して～

南大隅町立神山小学校 教諭 坂元 宏輝

目 次

1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2 研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

3 研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

 (1) 本校研修テーマから

 (2) 子供の実態から

4 研究の仮説と具体的な取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

5 研究の構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

6 研究の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

 (1) 仮説Ⅰ【「論理的思考力(ロジカル・シンキング)」の育成】

 (2) 仮説Ⅱ【単元の目標の明確化】

 (3) 仮説Ⅲ【学びを生かす】

7 研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

 (1) 成果

 (2) 課題

8 おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

〔引用・参考文献〕

・『小学校学習指導要領解説 社会編』	文部科学省	平成29年
・『大隅学力向上リーフレット 令和4年度版』	大隅教育事務所	令和4年
・『社会科 授業づくりのコツ』	澤井陽介	明治図書出版 令和4年
・『垂水市漁協組合(ホームページ)』		

1 はじめに

南大隅町立神山小学校に赴任して、今年度は4年目になる。一昨年の自閉・情緒障害特別支援学級の担任に続き、昨年度は6年担任をさせていただいた。かつて、尊敬する先輩の先生から「学級経営の根底には、特別支援教育があり、その視点をもつことはとても重要なことだ。」と教えていただいたことがあったのだが、そのことを大きく実感できる1年となり、自身の成長にもつなげられたのではないかと思う。しかし、当然であるが学級経営に「ゴール」というものはなく、教師自身が学び続けなければならないことも改めて実感することができた。今年度は、5年担任をさせていただいている。通常学級の中でも、学習面や生活面において、「困り感」をもっている子供たちがいることは事実である。昨年度に、私自身が得た経験を生かしながら学級経営に臨んでいるが、試行錯誤の繰り返しである。しかし、その中でも多くの実践を行うことで、「学校が楽しい」と言ってくれる子供が増えたり、子供たちとの信頼関係が生まれたり、少しずつ成果が出始めている。本研究は、社会科の視点において、「思考ツール」と「振り返り」を効果的に活用し、子供たちが「わかった！できた！」を多く実感できる授業づくりを目指し、様々な取組を行った実践記録である。

2 研究主題

「思考ツール」と「振り返り」で授業を変える ～社会科実践を通して～

3 研究主題設定の理由

(1) 本校研修テーマから

近年、社会全体のモラルの低下、家庭や地域社会の教育機能の低下、自然体験の不足、社会変化に伴う様々な課題等、子供たちの「生きる力」の発達を妨げる課題が指摘されている。本校でも、子供たちの授業態度や友達との接し方、言葉遣い等の様子から、それらの課題がうかがえるところがあり、子供たちの学力低下にもつながっている。しかし、課題に対して、教師が子供たちに教育的なアプローチをしなければならないことは明らかであり、何より子供たちに、将来「生きる力」を付けさせてあげることが、教師として何よりも大切なことである。本年度の校内研修テーマは、生徒指導と関連させた「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」となり、教師同士で学びを深めることとなった。

(2) 子供の実態から

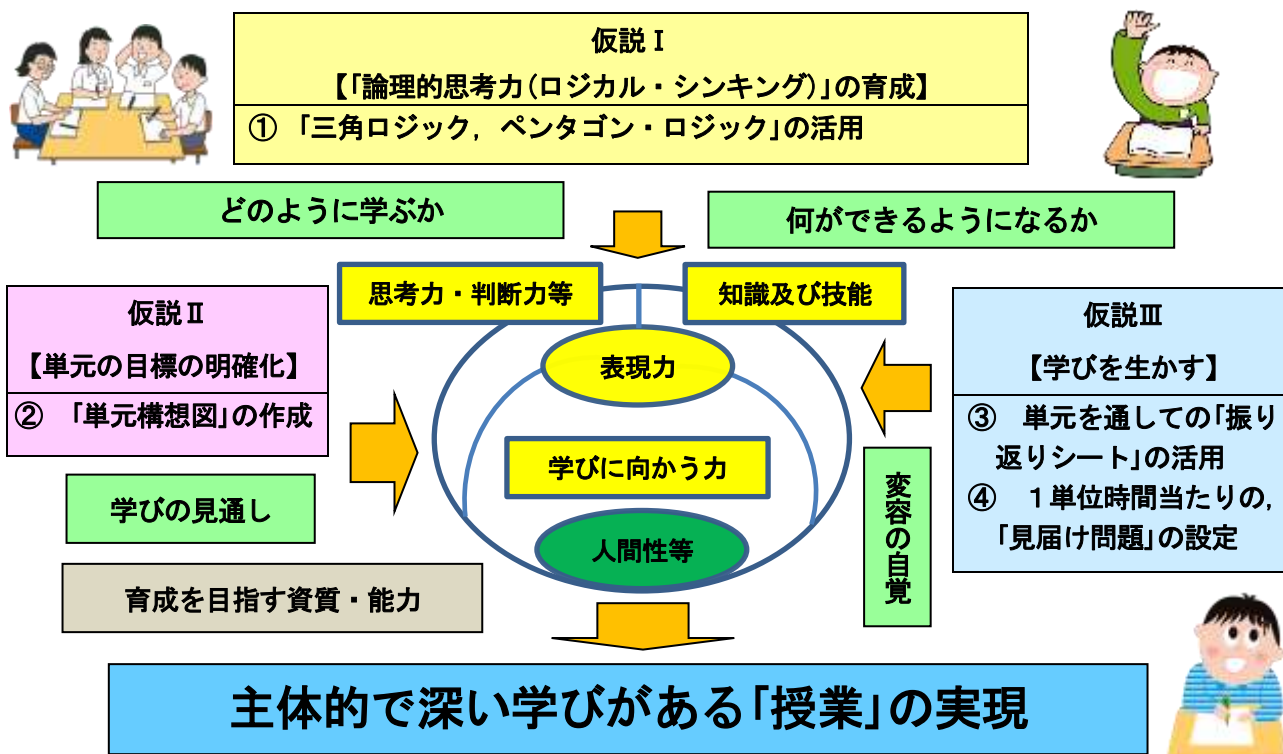
今年度、本学級について年度当初のアンケートや成績、学習態度等から、子供たちの実態を少し把握することができた。まず、子供たちの学習状況は、大きく3層に分かれていることである。1つ目は、学習において意欲的で理解度が高く、積極的に意思表示や発表を行う子供たち(A)である。2つ目は、学習の理解度はある程度あるが、自身の考えを発表することが苦手な子供たち(B)である。3つ目は、学習においてどのように学べばよいかよく分からず、その結果意欲の低下につながってしまっている子供たち(C)である。(以下、A、B、Cの子供たちとする。)そして、本学級の子供たちは、今までの経験から学習に自信がもてず、Cの子供たちが半分以上を占めており、当初はノートすら書かない場面も見られた。年度当初の授業は、どの教科もAの子供たちの発表やつぶやきにより、授業が展開されて

いった。しかし、その場合多くの子供たちが板書を写すだけの「受け身」の学習になっており、学級全体の子供たちが「主体的な学び」をしているとはとても言えなかった。しかし、一昨年の特別支援教育の経験を生かすこと、そして、本校の職員研修のテーマの検証という視点からも、「困り感をもっている子供たちに、どのような支援や指導の工夫を行うか」ということは、研究の大きな目的の一つである。ABCの全ての子供たちが、主体的に学ぶことができるよう、仮説を立てて研究を行った。

4 研究の仮説と具体的な取組

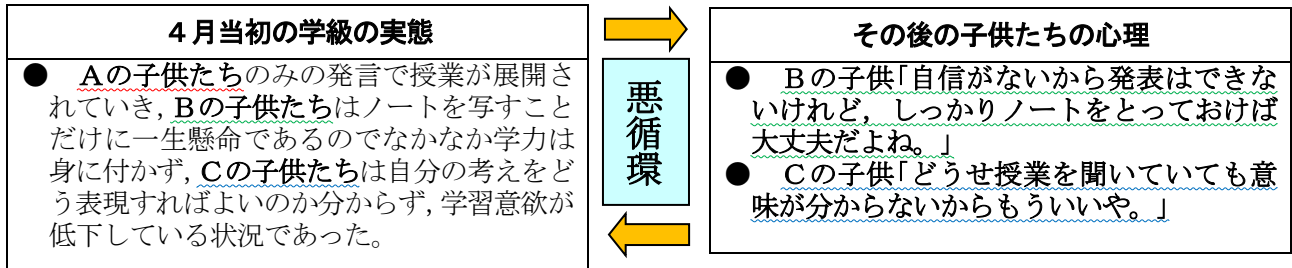
	仮説	具体的な取組
I	【「論理的思考力(ロジカル・シンキング)」の育成】 自分の考えを、教科書の資料や社会的事象などの「事実」を基に明確にもつことができれば、対話により説得力が付き、相手の気持ち・考えを理解する中で自分の考えを広げたり深めたりすることで「社会的な見方・考え方」が鍛えられ、「深い学び」へとつながるのではないか。	① 「三角ロジック、ペンタゴン・ロジック」の活用
II	【単元の目標の明確化】 子供たちがしっかり単元の終末(ゴール)の見通しをもっておくことで、身に付けた「知識・技能」を活用し、「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう力・人間性等」を育成することができるのではないか。	② 「単元構想図」の作成
III	【学びを生かす】 単元を通して「振り返り」の場を設定することで、「分かったことやもっと知りたいこと、疑問」等が子供たちの「メタ認知力」「自己調整力」「書く力」を育成し、「自身の変容」を感じることができるのではないか。また、1単位時間当たりの「見届け」を確実にを行うことで、子供たちが「学んだこと」が明確になり、それがまた自分の考えの「根拠」となり、「社会的な見方・考え方」が鍛えられ、「深い学び」へとつながるのではないか。	③ 単元を通しての「振り返りシート」の活用 ④ 1単位時間当たりの、「見届け問題」の設定

5 研究の構想



6 研究の実際

(1) 仮説 I 【「論理的思考力(ロジカル・シンキング)」の育成】



【「論理的思考力(ロジカル・シンキング)」の育成】

【ねらい】

- 自分の考えを「**事実**」を基に明確にもつことで、「**自信**」と「**説得力**」をもたせることができるようにする。
- 相手の気持ち・考えを理解する中で自分の考えを広げたり深めたりすることで、「**社会的な見方・考え方**」が鍛えられ、「**深い学び**」へとつなげることができるようにする。
- 「**学び方**」を理解させることで、子供たちが安心して学び、自分の意見を堂々と発言できるようにする。

実践

① 【三角ロジック、ペンタゴン・ロジック】の活用

子供たちに最も多かった「困り感」は、「自分の意見(考え)をもつことが難しい。」であった。ここで、大隅教育事務所からご指導いただいた「三角ロジック、ペンタゴン・ロジック」の活用を紹介していく。今回の実践は、非常に多くの成果を出すことができた。

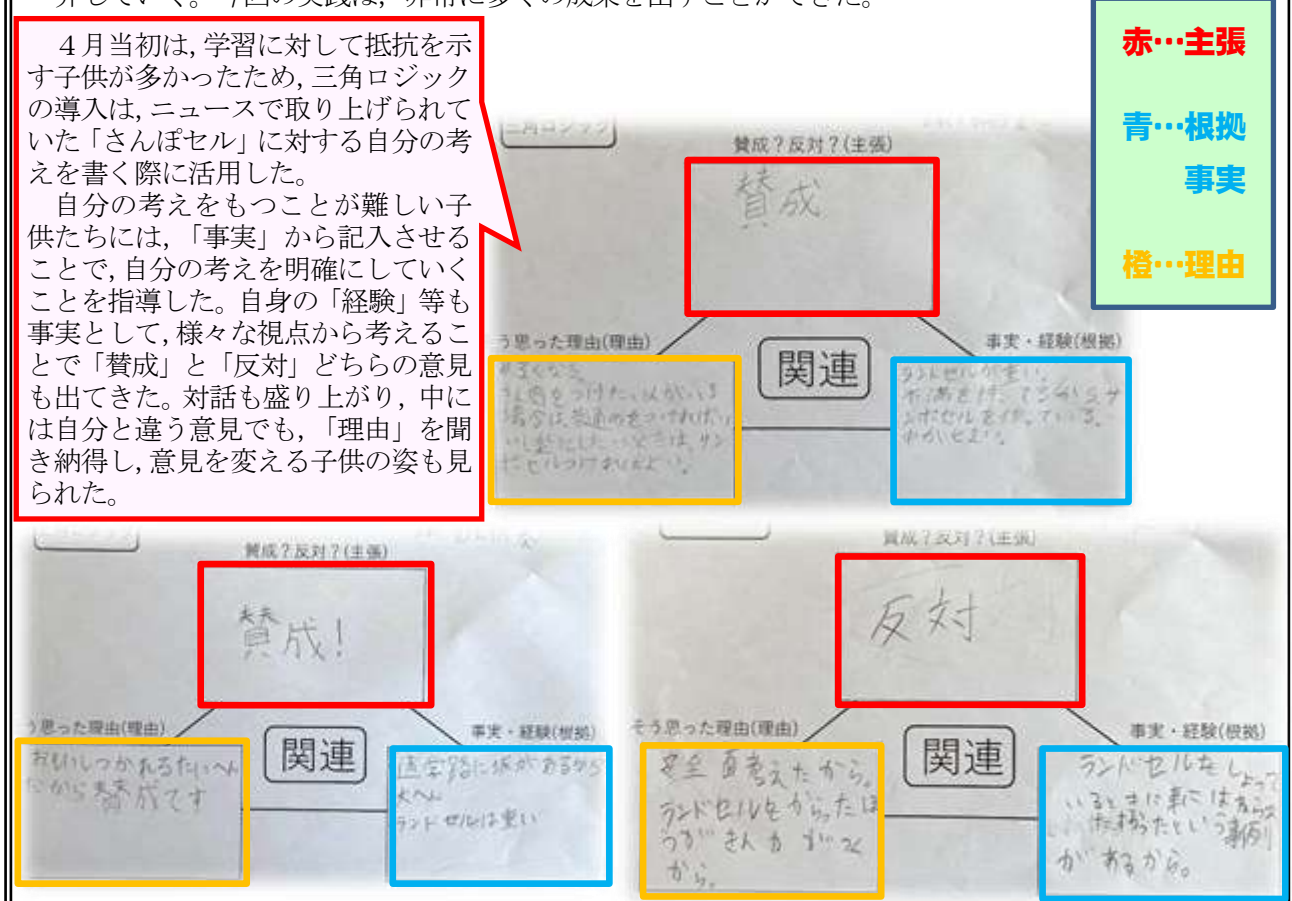
4月当初は、学習に対して抵抗を示す子供が多かったため、三角ロジックの導入は、ニュースで取り上げられていた「さんぼセル」に対する自分の考えを書く際に活用した。

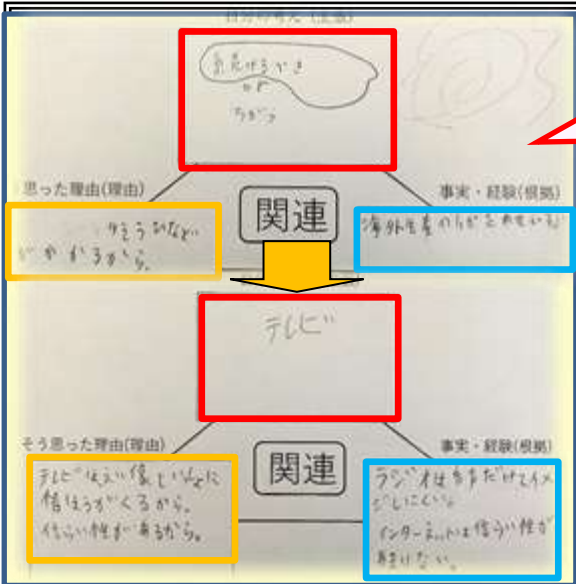
自分の考えをもつことが難しい子供たちには、「**事実**」から記入させることで、自分の考えを明確にしていくことを指導した。自身の「**経験**」等も事実として、様々な視点から考えることで「**賛成**」と「**反対**」どちらの意見も出てきた。対話も盛り上がり、中には自分と違う意見でも、「**理由**」を聞き納得し、意見を変える子供の姿も見られた。

赤…主張

青…根拠
事実

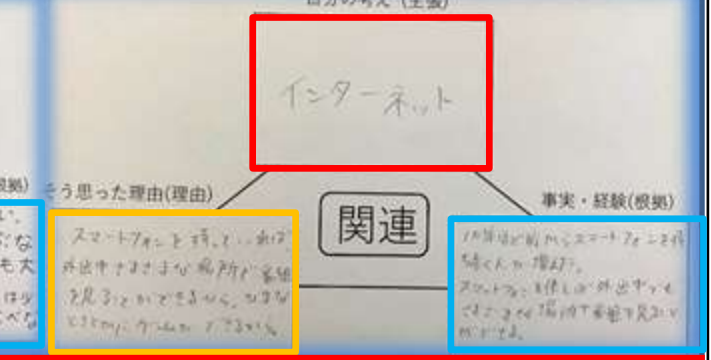
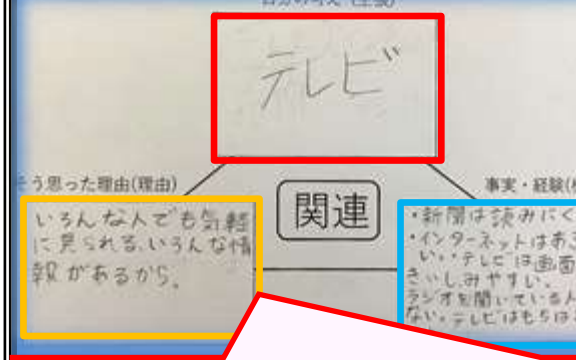
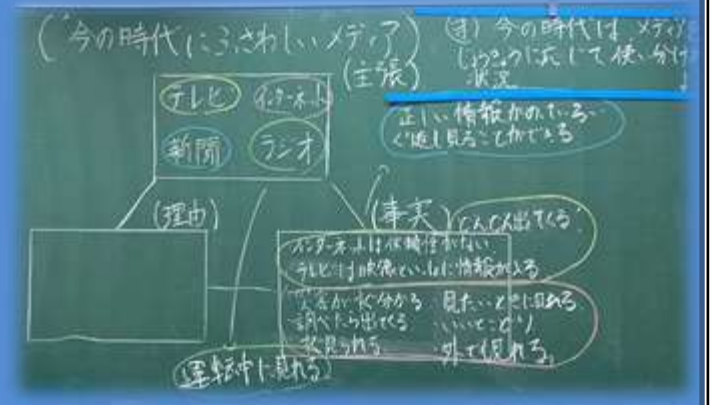
橙…理由





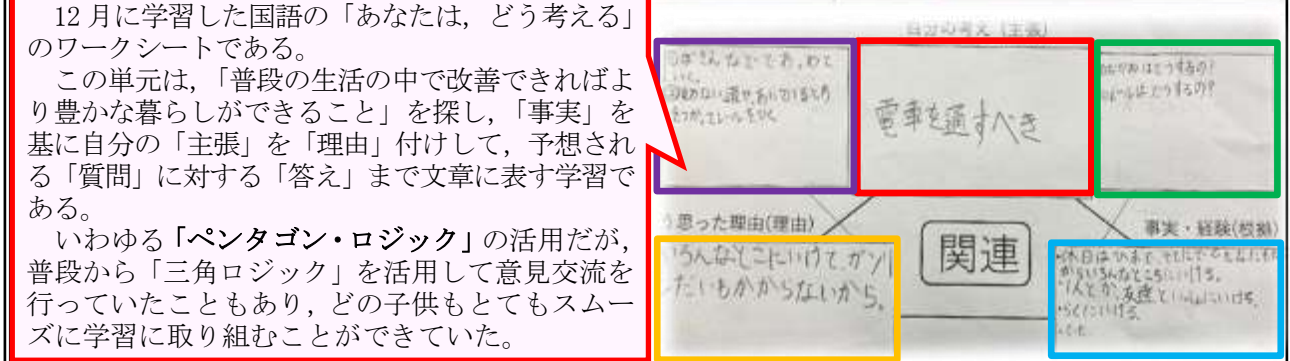
変容

この2つの三角ロジックは、同じ子供が記入したものである。上の三角ロジックは、「事実」と「理由」が関連していないが、下の方はしっかりと関連している。
 どの教科でも三角ロジックの活用を継続することによって、「三角」の歪みが少なくなってきている。この子供に限らず、学級全体で変化を感じることができる。そのことが、子供たちの「自信」にもつながっている。



小単元「情報を伝える人々とわたしたち」の「メディアの変化」について考える学習である。「現代では、情報を得る手段として、どのメディアがふさわしいのか。」というめあてで授業を行った。
 これまでの学習では、主に「放送局(テレビ)」について学習していた。また、南日本新聞社の方に出前授業に来ていただき「新聞」のよさを知り、更に子供たちが一番身近である「インターネット」、そして「ラジオ」の4つのメディアから、最も優れているものを「三角ロジック」を用いて議論した。対話をし、考えを深めていく中で、「状況によって使い分ければよい」と子供から意見が出て、本時のまとめとなった。
 これまでの学びや経験が子供たちの「事実」となり、意見交流も活発になり、「深い学び」を実感することができた。

この授業の子供の「振り返りシート」を見てみると、考えが再構築され、それぞれのメディアのよさを理解していることがうかがえる。



12月に学習した国語の「あなたは、どう考える」のワークシートである。
 この単元は、「普段の生活の中で改善できればより豊かな暮らしができること」を探し、「事実」を基に自分の「主張」を「理由」付けして、予想される「質問」に対する「答え」まで文章に表す学習である。
 いわゆる「ペンタゴン・ロジック」の活用だが、普段から「三角ロジック」を活用して意見交流を行っていたこともあり、どの子供もとてもスムーズに学習に取り組むことができていた。

(2) 仮説Ⅱ【単元目標の明確化】

【ねらい】

- 子供たちが単元の終末(ゴール)の見通しをもつことで、学習していく中で身に付けた「知識・技能」を活用し、「思考力・判断力・表現力」や学びに向かう力・人間性等を育成していく。

実践

② 「単元構想図」の作成 (小学校第5学年 小単元「水産業のさかんな地域」全9時間)

単元・題材等で育てたい資質・能力

- 我が国の水産業が、自然条件を生かして営まれていることや、その生産に関わる人々の工夫や努力によって支えられていることを理解するとともに、地図帳や統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身につけようとしている。**【知識および技能】**
- 水産業に関わる人々の働きを多角的に考える力、水産業に関わる課題を把握して、これからの水産業の発展について考える力、考えたことを説明する力を養う。**【思考力、判断力、表現力等】**
- 我が国の水産業について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。**【学びに向かう姿勢、人間性等】**

単元のめあて

第1時	第2時	第3時
<p>1 好きな寿司ネタランキングから、その魚介類がどこからきているかを考える。</p> <p>【めあて】 私たちが食べている魚は、どこからきているのだろう。</p> <p>2 資料から水揚げ量が多い漁港の位置やよくとれる水産物の種類を探し、暖流と寒流の潮目に魚が集まることを捉え、理由を検討する。【三角ロジック】</p> <p>3 暖流で水温が安定し、寒流で栄養のあるプランクトンが集まり、潮目に魚が集まることを全体で共有する。</p> <p>【まとめ】 暖流と寒流が流れ込む日本各地では、豊富な水産物が取れる。また、魚を育てて取る養殖業もある。</p> <p>【単元のめあて】 取る漁業や育てる漁業の工夫や努力、課題について調べ、根占漁協の直売所に提案書を貼ってもらおう。</p> <p>4 見届け問題をする。 5 本時の学習を振り返る。</p>	<p>1 サンマの漁をする船のライト点灯動画を視聴し、課題を捉える。</p> <p>【めあて】 なぜ、サンマ漁の船はこんなに明るいのか。</p> <p>2 資料から事実を探し、ライトが必要かどうかを考える。【三角ロジック】</p> <p>3 サンマがライトに集まること、また船の燃料の半分はライトに使用していること、さらに新鮮さを保つ工夫として、フィッシュポンプや紫外線殺菌海水とシャベット氷が活用されていることを全体で共有する。</p> <p>【まとめ】 根占港でサンマの水揚げは多く、点灯する棒受網漁で効率よく漁をし、新鮮さを保ったまま港へと運んでいる。</p> <p>4 見届け問題をする。 5 本時の学習を振り返る。</p>	<p>1 マグロやブリの競りの写真を見た後、サンマの競りの写真を見せ、違いに気づき、課題を捉える。</p> <p>【めあて】 マグロやブリの競りには魚を置いているのに、なぜサンマの競りには置いていないのだろうか。</p> <p>2 資料から事実を探し、サンマを競りに置いてよいかどうかを考える。【三角ロジック】</p> <p>3 サンマは鮮度がとても大切であり、並べていると鮮度が落ちることを全体で共有する。また、水揚げ量の多さもわかる資料も用意する。</p> <p>【まとめ】 さんまを置かないのは、鮮度を保つためである。氷水に入れておき、競りが終わったらすぐに運ぶ。</p> <p>4 見届け問題をする。 5 本時の学習を振り返る。</p>
第4時	第5時	第6時
<p>1 前時の学習から、サンマを新鮮な状態で運ぶことの大切さを確認し、どのように運ぶかを考え、課題を捉える。</p> <p>【めあて】 サンマを「たくさん」「新鮮なまま」運ぶために、どのような工夫をしているのだろうか。</p> <p>2 資料から事実を探し、輸送の仕方をまとめる。どの場所にはどの輸送手段が適しているか、事実から自分の考えを明確にし、話し合う。【三角ロジック】</p> <p>3 鮮度を保つ工夫をしなから、多くは安定して運べるフェリーやトラックで輸送し、急ぐ場合には航空機で輸送することもあるということを、全体で共有する。</p> <p>【まとめ】 紫外線殺菌海水と窒素水で箱詰めにし、安定した時間で大量に運べる高速フェリーやトラックを中心に輸送している。わずかだが航空機輸送もある。</p> <p>4 見届け問題をする。 5 本時の学習を振り返る。</p>	<p>1 日本のブリの養殖生産量の資料から鹿児島県が盛んであることに気づき、なぜかを考え、課題を捉える。</p> <p>【めあて】 どうして長島町ではブリの養殖が盛んなのだろうか。</p> <p>2 資料から、長島町でぶりの養殖が盛んな理由や作業の流れ、作業で気をつけていることを探す。サンマの漁と似ている点、違う点について考え、話し合う。【三角ロジック】</p> <p>3 ブリを育てる上で必要な環境や整備、作業について全体で共有する。</p> <p>【まとめ】 暖流や入り組んだ地形を生かしているため、長島町ではブリの養殖が盛んである。品質や安全性を保ち、環境を汚さない工夫をしている。</p> <p>4 見届け問題をする。 5 本時の学習を振り返る。</p>	<p>1 前時までの学習を振り返り、日本は水産業において様々な工夫や努力をしていたことを確認する。日本の自給率の資料を提示し、課題を捉える。</p> <p>【めあて】 海に囲まれた日本が、魚を輸入しているのはなぜだろうか。</p> <p>2 資料から、環境の変化や生産量、外国との競争に着目し調べ学習を行い、輸入の必要性について話し合う。【三角ロジック ペンタゴンロジック】</p> <p>3 お互いの考えや意見を取り入れたら質問したりしながら輸入の必要性についての考えを再構築し、全体で共有する。</p> <p>【まとめ】 日本の漁業生産量は、環境の変化や外国との関係(競争)で、生産が安定しない。</p> <p>4 見届け問題をする。 5 本時の学習を振り返る。</p>

三角ロジック、ペンタゴン・ロジックの活用(青枠)

第7時	第8時	第9時
1 前時の学習を振り返り、養殖の生産量は他の漁と比べて安定していたことを確認する。	1 前時までの学習を振り返り、国内での生産量や消費量について考え、課題を捉える。	1 単元のめあてを再確認し、これまで学習してきたことを生かしながら、どのような提案書を作成するかを考える。
【めあて】日本は、養殖100%に切り替えたほうがよいか。	【めあて】安定した水産物の生産量と消費量を持続させるために、国内ではどのような取組をしているのだろうか。	【めあて】根占漁協の直売所に貼ってもらった「持続可能な水産業への提案書」をみんなで考えよう。
2 資料から、養殖をするにあたって必要なものを探し、100%がよいかという自分の考えをもち、話し合う。 三角ロジック ペンタゴンロジック	2 資料から、生産量・消費量を安定させるための取組を調べ、それぞれの取組が効果的か自分の考えをもち、話し合う。 三角ロジック ペンタゴンロジック	2 地域でできること、学校でできること、家庭でできることと視点をもち、自分の考えをまとめ、議論する。 三角ロジック ペンタゴンロジック
3 お互いの考えや意見を取り入れたり質問したりしながら養殖に切り替えられるかどうかの考えを再構築し、	3 お互いの考えや意見を取り入れたり質問したりしながら全体で共有する。	3 全体で共有する。
【まとめ】養殖業でも稚魚や生えさが必要となるので、養殖だけでは頼れない。外国と協力して水産資源を守る取組みが課題となる。	【まとめ】生産量を安定させるために、完全養殖や栽培漁業、放流や魚のすみか作りを取り組み、水産物のブランド化や加工商品化で消費量を増やそうとしている。	【まとめ】地域でできることは〇〇、学校全体でできることは〇〇、家庭でできることは〇〇がある。
全体で共有する。 4 見届け問題をする。 5 本時の学習を振り返る。	4 見届け問題をする。 5 本時の学習を振り返る。	4 見届け問題をする。 5 単元の学習を振り返る。

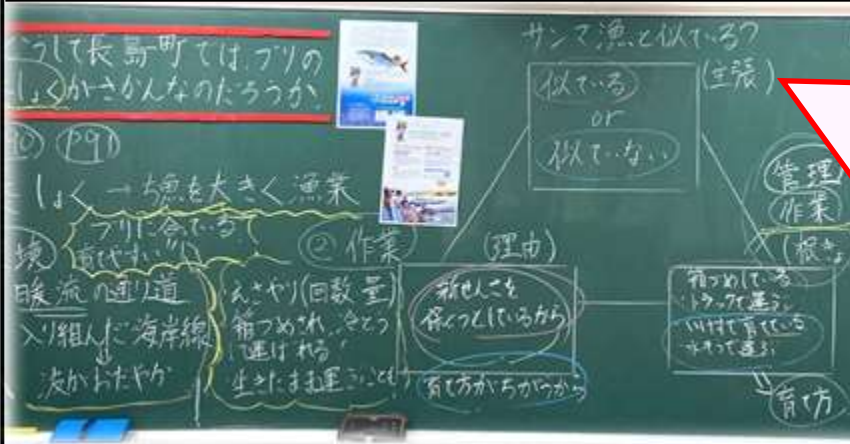
小単元「水産業のさかんな地域」の9時間の単元構想図である。南大隅町は漁業が盛んであり、単元のめあてを「取る漁業や育てる漁業の工夫や努力、課題について調べ、根占漁協の直売所に提案書を貼ってもらおう」と設定し、地域教材の積極的な活用も試みた。

実際に、家族や知り合いが漁業に携わる仕事をしている子供も多く、単元当初から学習意欲の高さをうかがえた。また、単元の終末（ゴール）を見据えることで、子供たちが「何を学んでいくのか（習得する知識・技能）」を見通すことにつながった。

単元構想図を作成する上で特に意識したのが、1単位時間の中に「三角ロジック」又は「ペンタゴン・ロジック」を必ず活用するという点である。今回の研究で明らかになったことが、「単元のはじめと終末では、三角ロジックの活用、効果が大きく異なる」ということである。

小単元「水産業のさかんな地域」の単元構想図を例にすると、第2時の三角ロジックの活用は、「さんまの漁に、ライトは必要かどうか」を、教科書等の資料から「さんまの光に集まる習性」という事実（知識）を定着させるというところに効果があった。逆に言うと、明確な「事実」があるため、ほとんど議論にならない。

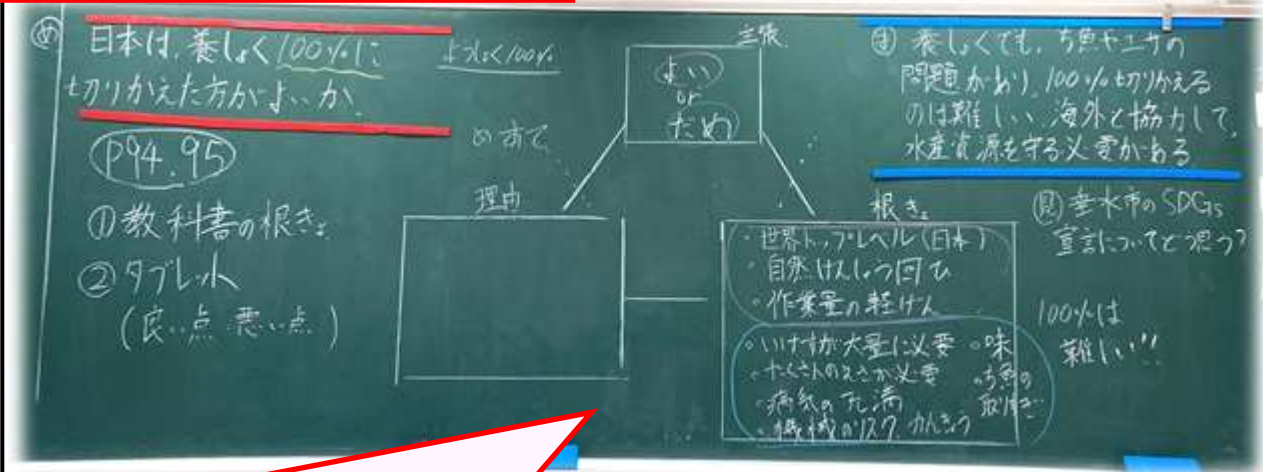
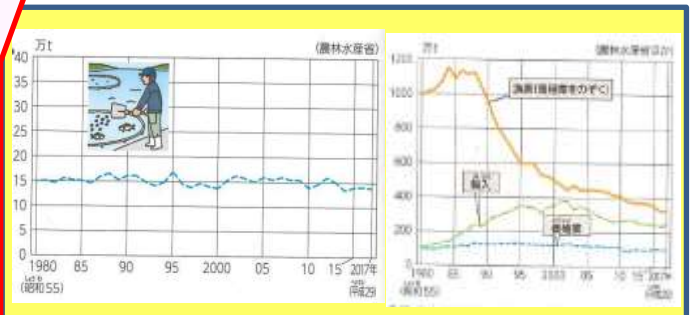
しかし、単元の終末になると、それまでの蓄積された「学び」が子供たちそれぞれの「事実」となり、学習のめあてが社会全体の「課題」になっているので、様々な意見が出やすい。また、「生産者」や「消費者」といった複数の立場からの視点で多角的に考えるため、意見交流が活発になり、「ペンタゴン・ロジック」へと発展し、「主体的で深い学び」の理想に近い姿になり得ることが多かった。単元構想図に則って行った授業をいくつか紹介していく。



第5時の授業である。三角ロジックを用いた議論によって、これまで学習していた「さんま」と本時で学習した「ブリ」は、「漁の方法」という視点で見ると異なるが、「新鮮さを保つ管理や作業」という視点で見ると似ていると理解を深めた。そして、「漁の方法」の事実を調べる中で、長島町が、ブリの養殖が盛んな理由が分かっている、まとめの解決につながった。



第6時の授業である。「日本は海外から、魚を輸入する必要があるか。」という問いに対して、三角ロジックの活用を行った。左のグラフを「事実」として、「養殖業が安定しているから必要ない」という考えも数人いたが、右のグラフを「事実」として、「養殖業での割合が低いから、やはり輸入に頼る必要がある」という主張が多かった。また、今回は授業の展開場面で三角ロジックを取り入れたが、別の検証授業で、「まとめ」の後に三角ロジックを取り入れた授業を拝見した。三角ロジックの効果が大きく違ったので、今後研究を深めたい。



第7時の授業である。ある子供が、第6時の「振り返りシート」の中に、「養殖業は安定しているから、今後は養殖業を増やしていけば、やっぱり輸入の必要はないのではないか。」と記入していた。単元構想図を作成した時点で、この「めあて」は決まっていたのだが、「振り返りシートにこのような意見があったので、みんなでもう一度考えてみよう。」という導入で授業が始まった。何より、子供たちがここまで真剣に考えており、「学びに向かう力・態度」が育っていることを非常にうれしく感じた。「養殖100%に切り替えてよいかどうか」というテーマで三角ロジックを活用したが、今回は「事実」の枠を広げるために、タブレットでの調べ学習も許可した。養殖業のメリット、デメリットどちらも「事実」としてたくさん挙がり、生産者と消費者の、両方の立場の視点で多角的に考えていた。活発な意見交流が行われ、「ペンタゴン・ロジック」が十分に活用されていた。議論の決め手になったのは、稚魚などの水産資源を多く必要とすることで、「取りすぎはよくないから、100%にするのは難しい」とまとめられた。「振り返りシート」に養殖のことを書いていた子供も、「100%に切り替えられない理由が分かって、すっきりした。」と記入していた。そして、これだけ活発な意見交流ができるようになったのも、子供たちの「社会的な見方・考え方」が鍛えられていることを実感し、担任として大きな喜びを感じた。

(3) 仮説Ⅲ【学びを生かす】

【ねらい】

- 「振り返り」の場を設定することで、「分かったことやもっと知りたいこと、疑問」等が子供たちの「メタ認知力」「自己調整力」「書く力」を育成し、「自身の変容」を感じさせる。
- 1単位時間当たりの「見届け」を確実にを行うことで、子供たちが「学んだこと」が明確になり、それがまた自分の考えの「根拠」となり、「社会的な見方・考え方」を鍛えていく。

実践

③ 単元を通しての「振り返りシート」の活用

タイトル	内容	感想
...
...
...
...
...

三角ロジックを用いて意見交流が活発な授業になると、「振り返りシート」の記入も充実してくる。また、4月当初のもの比べてみても、「メタ認知力」「自己調整力」「書く力」のどの力も育ってきていることがしっかりうかがえる。子供たちの「疑問」が、次時のめあてになることもしばしばある。

④ 1単位時間当たりの、「見届け問題」の設定

見とどけ問題
 いいと思う
 ち魚などを取りすぎない
 いままで天然物がじ。か
 り残。てせ。つめ。つをふ。せ
 げるから。



単元構想図の第7時の「見届け問題」である。垂水市漁業協同組合が「SDGs宣言」をしたことについて、「稚魚などの水産資源を守ろうとしている」という身に付けた「知識」を、「思考・判断・表現」し、記述していることがうかがえる。また、地域教材を取り入れることによって、より身近な問題として感じることができ、「社会的な見方・考え方」が鍛えられていく。

記述式の見届け問題では、記入することが難しい子供がいたり、時間内に見届けができなかったりすることがあるため、選択式の見届け問題も今後検討していく。

見届け問題

日本中の回転寿司屋のすしネタが減りました。なぜだと思いますか。当てはまるものすべてに○をつけなさい。

- () 海水温の上昇
- () 外国からの輸入が増えた
- () 外国との関係で漁獲量が制限された
- () 政府による魚の買いしめ

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- 単元テスト・観点別テストを含めた学級の達成度

	知識・技能	思考・判断・表現	合計		1→2学期
1学期	58.5%	63.3%	60.0%	知識・技能	+21.7%
2学期	80.2%	83.4%	81.8%	思考・判断・表現	+20.1%
				合計	+21.8%

一つ目は、「単元テスト・観点別テスト」の達成度の向上である。差はあるが、「知識・技能」「思考・判断」「合計」と、どの観点も飛躍的に向上していることが分かる。このことは子供たちにも大きな自信につながっており、ますます意欲的に取り組むというよい循環が生まれている。

- 「関心・意欲・態度」の向上

1学期当初のアンケートでは、「社会も含めて、学習はあまり好きではない。」といった子供たちの回答が多かった。しかし、今は「社会は楽しい。」と回答している子供が学級の8割を超えている。また、授業の様子からも「**学びに向かう姿勢**」が大きく変わった子供が多くいることがうかがえる。ますます子供の意欲を高めていきたいと思う。

- 「三角ロジック」と社会科の相性

教科書等の資料や世間のニュース、自身の知識などの社会的事象を「事実」として考える社会科の学習は、根拠をもちやすいので、「三角ロジック」と社会科は非常に相性がよいことが分かった。単元を通して、どの場面で活用するかも効果が違ってくるので、更なる研究を深めたい。

(2) 課題

△ 子供たちは「単元テスト・観点別テスト」で飛躍的な成長をすることができたが、まだまだ達成度は上昇する。教師側が現状に決して満足してはいけない。どの分野で子供たちが苦手意識や不十分な理解があるのかを分析し、更なる学力向上につなげていく。

△ 最近のアンケートで「8割の子供が、社会は楽しい。」と回答したと述べたが、逆に言うと、残りの「2割」の子供は、まだ何かしらの苦手意識や困り感をもっていると考えられる。教師の目標は「10割」であるので、全ての子供たちが「社会は楽しい！」と回答するような「主体的」で深い学びのある授業づくりを目指していく。

8 おわりに

一昨年度、自閉症・情緒障害特別支援学級の担任をさせていただいて多くのことを学ぶことができた。そして、本年度は5年担任をさせていただきながら、改めて「困り感」をもっている子供への支援・手立ての大切さを認識することができた。また、本学級の子供たちは、4月当初は学習意欲が低い子供が多かったが、現在はどの教科も非常に意欲的である。「**子供を変えるのは教師であって、授業が命**」だと、改めて実感することができた。今後も教師自身が熱意を忘れず、前に進み続けたい。